

朝を  
ひらく

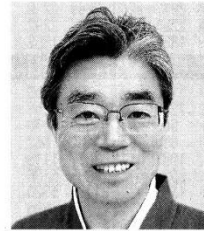
人間はある出来事を境に価値観が逆転する時がある。元来ひとは、お金、出世、承認欲を満たそうと日々努力を重ねる。しかし、時にその価値観が逆転する。お金で象徴される世界から、精神世界である、家族、安らぎ、スピリチュアリティにシフトされるのである。

「ええ！2週間後山口県へ転勤ですか！」「いま1歳5カ月の子どもと妊娠8カ月の妻がいるんですよ」

我が国の多くの企業は、有無も言わず辞令で社員を動かす。本人の家庭の事情は二の次。転勤は入社時に承諾済みだ

転勤辞令

永田 円了  
真国寺住職



ろう、と会社側は理詰めですつめ寄る。

「よく考えてください。これはあなたにとっての出世コースなんですよ」「もし、この辞令に従わないなら、最悪な事態になりますよ」

最悪な事態とは、言うまでもなく解雇である。辞令が出てからの2日間、彼は悩む。単身赴任をしても、12年間勤めた会社での出世コースに乗るか、それとも、辞令に背いても

子育て優先の選択をするのか、悩む。そして腹を決めて答えた。

「いま僕にとって一番大事なことは、家族です。転勤は僕が行かなければ、代わりの誰かがいくでしょう。でも子どもの父親役は僕しかいません」

子育てに奮闘しながらもフルタイムで働く妻、2カ月後には2児の父親になる自分。定職を失えば苦しい家計になる。でもそれが何だ、会社のいいなりにほなりたくない！

この決断を契機に何かがはじけ始める。今までの仕事を振り返ってふと思う。これが本当に自分が望んでいたものだったのか。機械と数字の世界よりも、もっと人間中心の仕事が

したかったのではなかったのか。数日して彼は私に言った。「僕は看護師になります。本当を言うと、もっと人間に深く関わり合う仕事でしたかったです！」

理系の大学院を出て、誰しもが認める大企業に就職、32歳で結婚、だが順風満帆の人生が一転する。転勤辞令という危機がなければ気付かなかったであろう人生の深まり。彼にとって一見悪魔にも思えた辞令、しかしこの危機のお陰で、人生の真の意味を知る旅がいま始まろうとしている。

神は悪魔を造った。悪魔を造ることによって、人間は苦しむ。しかし、その苦しみの中で、信仰というものが善を産み出す(精神科医・加賀乙彦)。

娘婿の勇氣ある決断に、私は最大の敬意を表したい。

気づいた人生の意味